第 6 章 市民の記憶

6-1　体験談 …… 152
6-2　自主防災組織の記録 …… 170
6-3　東日本大震災における
　　各まちづくり協議会等の検証とふりかえりの取組 …… 172
6-4　震災復興作文 …… 175

2011.5.3　古川八百屋市の様子

第 6 章 市民の記憶

6-1 体験談

次の世代の人たちに伝えたいことは
常日頃から地域のことを把握する，
必要なものを話し合うこと
～自衛隊との関わりを通じて～

民生委員児童委員協議会鹿島台地区会長
川越 壽美子 様

大崎市では民生委員の役割のひとつとして，震度５以上の地震の場合，各家庭を回って，被害状況などを行政委員へ伝えることになっています。

あの日私は，用事があって鹿島台の庁舎へ行っていました。JA で買い物をして帰ろうと駐輪場に自転車を置いている時にあの地震に遭遇しました。

店内には入らず駐車場へ避難しました。JA の外側の窓ガラスが壊れて落下していまし。また，当時 JA のビルは工事中だったので，ビルが崩れてきたら大変だと思うほど大きな地震でした。子供たちがパニック状態になって駐車場に避難してきたので，「大丈夫だから。」と言って駐車場の中央で地震がおさまるのを待ちました。あれほど大きい地震は経験したことがありませんでした。地震がおさまった後，自宅が心配となり，すぐに帰宅しました。

自宅は水田を造成した場所に建てられており，昭和 61 年８月５日の洪水では床上浸水の経験がありました。今回の東日本大震災では住宅の実質的な被害はその時ほど大きくありませんでしたが，壊れたものがたくさんあり，まずは自分の家の片づけをしなければならなかったため，すぐに一人暮らしの人の家へ訪問することはできませんでした。

私たち民生委員は，地域の一人暮らしの高齢者の安否確認をすることが最初にする仕事です。私たち自身も被災者でしたが，落ち着くまもなく，民生委員としての活動を行いました。

鹿島台地域の行政区では自主防災組織が確立されていて，防災マニュアルを作って，自主防災活動をしています。家の前に張り紙をして「うちは○○に避難しています。」などと知らせてくれる家もあり，自主防災組織が機能している状況が随所に見られ，自主防災組織の重要性を感じました。

民生委員は一般的に災害時要援護者の人ではなく一人暮らしの高齢者の世帯を回ります。また，一人暮らしの高齢者の見回りの他に，児童のお世話などもあります。しかし，これまで地域の児童を把握する機会はあまりありませんでした。市の福祉課から児童や乳児のいる家を訪問して，「ミルクに困っていないか。」，「おむつに困っていないか。」などその家で困っている状況を聞き，申請をするようにしま

しょうと依頼があったため，私たち民生委員は児童の援助にも動きました。

民生委員の活動は生活弱者を見守るという活動が基本でしたが，思い出深いのは自衛隊の方々との関わりです。

鎌田記念ホールに自衛隊の野営地ができ，鹿島台庁舎の上を自衛隊のヘリコプターが毎日のように飛ぶようになりました。

毎日，野営地から被災地へ向う自衛隊の皆さんの姿を見て,「私たちで何か手助けできないか。」,「感謝の気持ちを伝えられれば。」という思いが湧き起こりました。自衛隊は一般の人からの差し入れ等を受け取らないという話でしたし，炊事班がいるので炊き出しも私たちが入る余地はありませんでした。しかし，少ない活動資金を捻出して作った石鹸やお米などは快く受け取ってくれました。感謝の気持ちを受け取っていただいたのだと思います。

自衛隊の方たちは本当に狭いところで生活しており，被災地で汗だくになり，泥だらけになって帰ってきても野営地にはお風呂の設備がないため，数日おきにお風呂に入るため仙台へ行っているというお話でした。洗濯もその時にしているみたいでした。

目にしたことも聞いたこともないようなことを見せていただいてすごく感動しました。新聞にも連日のように自衛隊の活動が掲載されていたのですが，改めて自衛隊の活動はすごいなと知りました。

自衛隊が撤収するときに感謝の気持ちを伝えるため，横断幕をあげて，雨の中でお見送りをしました。自衛隊の方から敬礼されると涙が出てきました。自衛隊の方も喜んでくれていたと思います。

その後，しばらくして自衛隊から感謝状を頂きました。自衛隊の活動が忙しいときは支援も断られたと思いますが，沿岸部の活動がある程度収まった時期を見計らっての時だったことが良かったのだと思います。

今回の経験で改めて次の世代の人たちに伝えたいことは，大地震はいつ来るかわからないので,自分の持ち場での仕事を達成できるように常日頃から地域のことを把握する，あるいは「震災時にはこういう物が必要だよね。」という話し合いを持つことが大事だということです。

たとえば,「断水したら井戸水をもらいに行こう。」と思ったけれども，どこに井戸があるかが把握しきれていないのではないでしょうか。井戸は市街地にはないけど山の方にはあるなど，小さなことでもいいから話し合い，言葉に出し合っていくことが大事だと思います。小さい積み重ねがいざというときに「そこに行くと助かる。」とか「あそこに水がある。」とか役に立つと思います。

そして，日常的に，隣人と交流するなどして民生委員を頼らなくても隣近所で助け合うようにするなど自ら進んで行動することが大切だと思います。

地震など災害は忘れたころに来るものですから，忘れないように常日頃の行いを大事にしていってほしいですね。

“お互い様”の心というのが若い人にもある素敵なことだと思いました

大崎市ボランティア連絡会会長　曾田 征子 様

3 月 11 日は中学校の卒業式に参加し，家に戻って着替えている最中に地震がありました。揺れがひどくなったので，急いで外へ避難して伏せた状態で家が揺れるのを見ていました。昭和 53 年にも大きな地震がありましたが，その時私は青森県にいましたので，あれほど大きな地震は経験がありませんでした。

余震もかなりありましたが，自宅は地震対策を行っていたので，食器が 1 個割れたくらいで特に被害はありませんでした。我が家の安全を確認した後，すぐに家族や両隣，近隣など歩ける範囲の家を回りました。

ボランティアセンターは 3 月 12 日から 4 月 15 日頃までの約 1 ケ月間設置しました。ボランティアセンターの設置場所は FM 放送や避難所に貼紙をするなどして住民へ知らせました。

ボランティアの依頼は，直接訪ねてくるか電話でした。最初の頃は高齢者から家を片付けてほしいという要望が多かったです。その後は，薬を受け取ってご自宅に届けたり，子供の保育など多様なニーズがありました。

「何人ほしいのか。」,「どういうことをしてほしいか。」という要望を書いたボランティアニーズ表を作成し，依頼者の住所，名前，仕事の内容，時間を把握して，手挙げ方式でボランティアに分けました。苦手な分野もあるので自分の好きな分野に手を挙げてもらう方式にしました。

ボランティアにはいろいろな人が来ました。最初の頃は，ヒールや短いスカートをはいて来る女性などボランティアに相応しくない恰好の人もいましたが，そういう人達も実際に現地に入ることで自分が浮いていることに気付いてくれたようです。

学校が休みだったことと電車が動いていなかったことなどから，当時のボランティアは専門学校生，大学生がほとんどでした。震災はあってはいけないものですが，若い人にとって地元貢献という意味で良い経験だったと思います。

最初の頃は，朝眠い顔をしていた人もいたけど，一回のボランティア体験でまた行こうという気持ちになるみたいで，毎日来た子もいました。また，疲れていても遅刻してまでも来る人がいました。「何か手伝いたい。」,「なんとかしなくてはいけない。」そういう部分で自分も社会に参加していると強く感じるようになったのだと思います。

ボランティアへ行ったときは「物をもらってきてはいけない。」という規則があります。その規則を守って，断りきれない場合はボランティアセンターへ持ってくるなど，若い人たちは素晴らしいなと思

いました。

ボランティアはいつでもどこでもだれでも参加できます。ボランティアセンターでなくても近所の高齢者たちに声かけするのもボランティアだと思います。日程を決めてやるものではなくて，普段の生活がボランティアになると言っていた子もいました。

震災から１ケ月が過ぎたあたりから沿岸部のボランティアにも携わりました。一方的な支援ではいけないので，「こういう仕事があります。」という依頼がある場合だけ参加しました。

ボランティア連絡会の中でも自分が被災した人や，親戚が亡くなった方が居たりしたので，まずは自分の身近なところから手伝いましょうということで，ボランティア連絡会で計画的にやるということはなく，独自で参加するなど単発で参加するという感じでした。私は写真洗いや炊き出しなどの手伝いをしました。

石巻市に写真の洗浄に行った時には，言葉になりませんでした。津波で流されて本当に何もない。

泥が着いたアルバムが運ばれてくると，そこから１枚ずつ写真を洗いました。洗うと見えなくなるものもありました。津波で全てが流され，手がかりが何もないから写真を１枚でも欲しいといって，洗った写真を干している横で見ている方もいたのが印象に残っています。

また，避難所へ炊き出しに行ったときは，足の不自由な高齢者しか残っていない状況でした。それらの高齢者から「人がいるだけでも心が和む。」と言ってくれたことを覚えています。人がいないとこんなにさびしいのだというのを感じました。

今回の震災を通して思うことは，ボランティアということで一線をおいてしまわないことだと思います。普通の生活の中でお互いに助け合うことがボランティアの精神だと思います。昔のボランティアは「福祉の心」，「奉仕の精神」でしたが，今のボランティアはお互いに助け合って，お互いに伸びよう，良くなろうと一歩前進する傾向があります。

今は「ボランティア」という言葉自体が一般化して，誰も違和感もなく使えるし，受け入れてもらえて，「ありがとう。」と言ってもらえる。「ボランティアに行ってくるからね。」と気軽に言えるようになりました。いい意味で身近になったと思います。

ボランティアをやってあげる人が良いということではなくて，お互いに勉強になったなとか，相手側の方から嬉しいと感じてもらったといったことが今のボランティアで一番大切だと思います。

この度のボランティア経験を通じて若い人たちの考えが変わったとか，いい意味で進歩発展したと思います。“お互い様”の心というのが若い人にもあると思ったし，素敵だと思いました。若い人たちがすごく頑張ってくれた現場を見てきたので感じることですが，大人たちがもっと若い人に期待して応援する姿勢でいると「今の若いものは。」なんて言わなくてすむのだと思いました。

菜の花フェスティバルは
“沿岸部の人を助けたい”
市民の心がひとつになって実現

有限会社千田清掃代表取締役社長　千田 信良 様

震災当時私は，市内の病院に入院中でした。点滴が外れ，テレビは吹っ飛ぶなど激しく揺れました。携帯電話のワンセグで状況が確認でき，何が起きているのか理解できたため，病院に「すぐに退院させて下さい。」とお願いし，翌日，急きょ退院させてもらいました。

退院後すぐに大崎市役所の災害対策本部に詰めて，会社と市災害対策本部を行ったり来たりしました。新潟の中越地震の時にも，自社の車両を新潟に派遣して，壊れた下水道のし尿をバキュームカーで運ぶ作業を一週間手伝った経験がありましたので，そういう経験を活かしながら市災害対策本部で環境保全課と連携して我々の分野でできる対策について相談しました。

最初は避難所の対応ということで仮設トイレの汲み取りをさせていただきました。また，燃料関係の仕事も行っていたことから，緊急車両等の燃料供給を市長に申し出ました。会社の地下タンクに軽油が10キロほど入っていて，ディーゼル発電機で運転していたのですぐにポンプを回して給油活動をすることができました。

その後も市災害対策本部から自社を緊急給油の指定を受け，全国から沿岸部の応援にきたバキュームカー60台の給油をはじめ，市内の緊急車両，災害支援車両に給油活動を行いました。

自社車両も沿岸部に行ってお手伝いさせていただきましたが，沿岸部の支援を考えたのは，女川町に住んでいる親戚と連絡がつかず，何とか救出に行きたいという思いで女川に向かったときのことでした。女川の町民体育館の異様な風景でした。畳一畳くらいの狭い空間に２人くらいの人が避難し，お風呂も入れない，ご飯もおにぎり１つしかもらえない…こんな現実を目の当たりにして，内陸部に住んでいる自分たちは恵まれていると感じました。そこで「沿岸部を支援したい。」と思い立ちました。

伊藤市長が言うとおり内陸部から沿岸部をバックアップしなければいけないという思いがその時芽生えました。

「菜の花フェスティバル」もそのひとつです。「宮城県復興のために何かできないか。」という事で，自社では菜の花を育てその種の油を使い，廃油でバイオディーゼルとして使うという事業をしていたのですが，そこから即座に鳴子温泉地域の菜の花の事が

頭に浮かび，黄色に咲き誇る菜の花で被災者を癒したいと思い「菜の花フェスティバル」の開催を思いつきました。すぐに「菜の花フェスティバル」の開催を大崎市に申し出ると，快くご理解をいただきました。

「菜の花フェスティバル」開催にあたっては，市内の多く企業や NPO からも協賛金や出店などのご協力をいただきました。また，杜けあきさん，さとう宗幸さんなどの著名人や陸上自衛隊中央音楽隊にもご協力いただくことができました。

準備期間は 1～2 週間と短い期間でしたが，産官学が連携し，官の力，民の力がひとつになったことで，短い期間で実施できたのではないかと思っています。また，限られた少ない予算のなかで，多くの人がボランティアとして協力してくれました。「被災者を助けたい。」，「自分も何かかかわりたい。」という気持ちが大崎市民の皆さんの中に芽生えた形の現れだったのではないかと思います。

皆さんの協力のおかげで，現在も春は菜の花，夏は海，山は鳴子の紅葉，またスキーとかそういう形で山と海とのきずなを深めようと，現在も活動は続いています。

この震災を通して思うことは，故郷のためにという気持ちを多くの若い人たちに持ってもらいたいということです。誰かにしてもらうのではなく，自分がという気持ちでやってもらいたい。そのためには地域にはリーダーが必要だなと感じております。これからの学校教育でも，経営者の勉強会でもリーダーを養成していかなきゃいけないと。そのリーダーによって運命も変わってくるところがあると思います。イベントでもいいので地域の子供たちと関わりながら気持ちを培っていけたらなと思っています。少しでも力になれたらなと思っております。

被災地に花を届けたい―それが私たち「すいせん植え隊」ができる支援活動でした

三本木まちづくり協議会、環境生活部会
すいせん植え隊　寺澤 道子 様

私は，民生委員の定例会で三本木庁舎にいました。定例会が終わるころに地震が起きて，階段を下りたら，庁舎の中はすごいことになっていました。家では100歳のおじいさんが一人残されているので心配でした。偶然知人が向いのスーパーに買い物に来ていて，おじいさんの様子を見に行ってくれました。おじいさんは外へ避難していたそうでひとまず安心しました。家の周辺の地盤が沈下して段差ができたため，門が開かなくなってしまいましたが，おかげさまで誰も怪我はありませんでした。

帰宅し，家族に「民生委員の仕事に行ってくる。」と伝えてコミュニティセンターへ向かいました。コミュニティセンターの中は避難者がたくさんいて区長が仕切っていました。コミュニティセンターでは，プロパンガスが使用できたことから炊き出しの協力をしました。停電だったので，冷蔵庫の物を腐らすよりみんなで食べる方がいいという事で，食材を持ち寄って炊き出しをしました。

沿岸部への支援のきっかけは，「すいせん植え隊」という活動を通してでした。この活動は，まちづくり協議会に対する意識を向上させるために，三本木の町花である水仙を植えたらどうかと考えて始めた活動です。現在は，商店街をきれいにしようということで，花を植えたプランターを貸出すレンタルフラワー事業や「色々チャレンジ交付金」を活用してハウスを作るなど活動範囲も広がっています。

地震があった３月は夏の種まきが始まったころでした。種まき，水かけなどをする作業をするため「すいせん植え隊」の仲間が集まった時に「私たちの活動を通して支援できることがあればやりたい。」，また，「みんなの力を借りたい。」と伝えました。するとみんなが「私たちも協力します。」と言ってくれました。話を進めていくうちに，「活動に協力するから。」と言って寄付などもいただきました。

最初に東北大の先生が「文房具を被災地へ送る運動をしているので，文房具はないですか？」と言われ，「すいせん植え隊」の活動の一つとして文房具を持って気仙沼市へ行きました。その後，「すいせん植え隊」で育てている花をどこかに提供したいと思いました。そのことをインターネットで募集したところ，東松島市の大曲小学校の先生が応募してくれました。

「大曲小学校は津波により校庭に何百台もの車が流されてきて，その車が校舎にぶつかってガラスが全部壊れ，一階は浸水したため，校舎の２階，３階に逃げた。」という話を聞きました。

私たちは毎日行って泥の撤去などはできません。「少しでも花を見て心を和ませてもらえれば。」と私たちにできることをお手伝いしたいと思いました。

大曲小学校はすべての花壇に海水が入っていたので，花壇の土を入れ替える必要がありました。若い

人にも協力してもらい，花壇の土を入れ替えて花を植えました。

また，町づくり協議会でひまわりを被災地に送ろうという「せんとひまわりプロジェクト」が始まり，石巻市の石ノ森漫画館，保育所，商店街にひまわりの種を植えたプランターを持っていきました。ただ持っていくだけでなく，軽トラックに水を積んで毎日水かけに行きました。保育所，商店街は自分たちで水かけしてもらって，石ノ森漫画館の水かけは私たちで行いました。

震災前には，沿岸地域との交流はありませんでしたが，「私たちにできる何かを…。」と始めたこの活動がきっかけとなり，交流は現在も続いています。今年は大曲小学校の児童たちと給食を一緒にしました。年に２回，春はマリーゴールド，秋はビオラを植えるなどしています。今年は水仙やチューリップの球根を植えて華やかにしました。

ほかには古い着物を使って服を作って，展示会をする活動もしています。仮設住宅に住む女性達が集まっていろいろと作っています。それを販売する場所を提供するのもいいかなと思っています。自分たちでも少しでもできると自信をつけてもらえたら嬉しいですね。

私たちも微力ながらお手伝いとして続けていきたい。そして，もうひとつ。つなぐことの大事も伝えていきたいと思っています。

何でもいいから訓練に参加して
危機意識を持つことが大事だと思いました

松山地域行政区会長　角田　均 様

3 月 11 日私は松山総合支所にいました。地震が発生した時は，みんな慌てふためいていました。これは大きな被害が出ると思い，揺れがおさまってすぐに地元に帰って安否確認を始めたという感じでした。地域には自主防災組織があって役割も決まっていますが，あの状況下ですぐに集まれるかと言えば，自分の家や自分のことをするので精いっぱいでした。家の事情，家族の事情があってすぐには集まれないのは当然です。

私は行政区を一通り見回りして被害状況だけは確認しました。後は，避難所の運営をしなければという気持ちがあったので，すぐに避難所を開設しました。家には寝に帰るだけで朝には避難所という感じでした。

翌 12 日朝 9 時に自主防災組織の人を集めて，「避難所生活になるから米と水を集めよう。」ということで，近くの農家に準備していただいた 30 キロの米を精米して用意しました。あとは地域の女性で手伝える人を集めました。避難した人が自宅の冷蔵庫の中にある食材を持って来てくれるなどしたので，避難所での食料は比較的良かったと思います。

松山地域は，断水していたため，水には困りましたが，飲料水として井戸水を確保しました。また，集会所のトイレの水は，国営の水路から提供してもらいました。

ほかに困ったことといえば，おむつやミルクなどの確保でした。高齢者におむつをはかせていたという人はおむつの確保が困難でした。また，乳児のミルクの調達も困難でした。それらの物資は，後に支援などでまかなうことができましたが，震災直後には手に入らず，言葉にはできないつらい体験でした。

避難所にいる時に「自分の家で電気釜が使えないため，集会所のガス釜で米を炊いてほしい。」という方が来た時に考えさせられることがありました。

地震が起きる前は，災害時でも命が無事でケガなどを負わなければ，食料はあるし，トイレにしても畑などを掘ればどうにかなると思っており，都会の人たちが騒ぐほど切実には考えていませんでした。しかし，最近はいろいろ便利になって，その分だけ災害時には弱くなっていることがあるのだと思いました。我が家では着火式のストーブの上でお米を炊くことができたけど，現代ではエアコンとかヒーターとかで，暖房機を利用してご飯を炊くことができない。自分は何とかなるという気持ちは持っていたのですが，誰もがそうではなかったということです。

松山地域では，平成 17 年に自主防災組織を立ち上げ，平成 22 年には松山地域のまちづくり協議会で

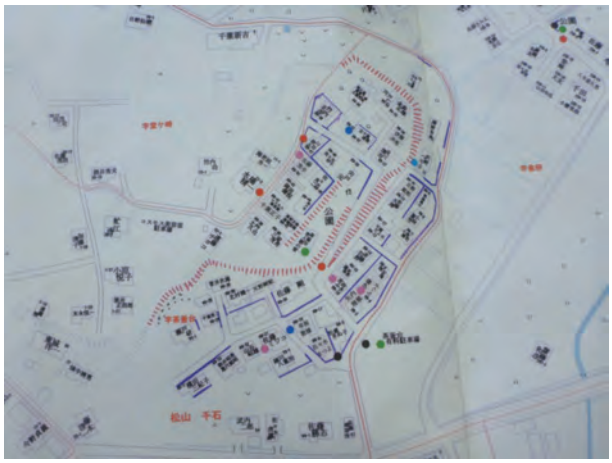
防災マップを作製するなど，住民の防災に対する意識が高い地域です。

過去にまちづくり協議会の安心・安全部会が中心となり，子供の安心・安全という点から子供たちにも自分の地元のどこに危険が潜んでいるのか，実際歩いて確認して，地図を作るという訓練をやりました。

子供たちには遊ぶ時に，自分の地域内にどういう危険な箇所があるかを認識して遊びなさいよということで，PTA と一緒に地図を使って「ここは水路があって危ない。」,「こっちはトンネルがあって危ない。」,「ブロック塀なんかはここが危ないよ。」という意識を子供たちに見せて，何が危ないかを示すという訓練です。その後に，訓練で作成した地図を基に災害時要援護者マップ（防災マップ）を作りました。

マップの中には地域の「危険な場所」,「消火栓がここにある」,「井戸水がここにある」と記してあります。また，災害時要支援者がいる家には，災害時要援護者マークのシールを貼ってあります。本人に了解を取る必要があるのですが，いやだと断る人もいます。

いろいろな人の意見を取り入れたマップを作成し，平成 22 年 11 月には完成して配布しました。



また，地図を作る訓練の他にも炊き出し訓練，救急・救護訓練，情報訓練なども行いました。これらの訓練でいちばん大事な事は，住民がいかに意識を高く持って参加してくれるかというところにあると思います。

今回の震災では，危機意識や真摯に対応する気持ちが大事だと思いました。火災や地震などの災害はいつ起こるかわからない。常日頃から心構え，落ち着いて行動する気持ちは常に維持しておいてほしい。何でもいいから訓練に参加してそういう場面に遭遇した時に自分はどうすればいいか，そして家族はどうしたらいいのか，周りに対してどうしたらいいかという意識を持つことが大切だと思います。

震災が教えてくれたものは
自分たちは地域に支えられて
野球をやっているということ

宮城県古川工業高等学校
野球部監督　間橋 康生 様

地震が発生した時，私は学校で入試業務をしていました。その後，野球部のグラウンドへ行った時には，野球部の生徒は，マウンド周辺に全員集まっていました。グラウンドでは照明が倒れ，ネット関係のワイヤーが全部切れた状態で野球ができる状況ではありませんでした。

次の日は練習試合の予定でしたが，「この状態では，明日の練習試合は中止だ。」ということを選手に告げました。

周囲の状況が把握できなかったので，野球部の生徒たちを自宅で待機させて，今後については改めて連絡することとしました。数日して，生徒たちは「何していいかわからない。」，「どういう状況かもわからない。」ということで，数人の生徒が自主的にグラウンドに集合し，キャッチボールをしていました。その時，周囲の人から「こんな時に野球やっている場合じゃないだろう。」というご指摘をいただいたと生徒から相談を受けました。生徒から「今後はどうなるのですか？」という相談も受けましたが，「野球をやりたい気持ちはわかるけれども，今はそういう状況じゃないだろう。」と伝えました。

その後，生徒たちでミーティングをさせたところ，ボランティアという言い方ではなかったですが，「何か手伝えることをやったらどうか。」ということでボランティア活動が始まりました。私から「ボランティアをやった方がいい。」という事は言わなかったです。あくまでも生徒たちが自主的に考えて始めたことです。

「何かお手伝いできることがありますか？」と，地域住民の方に聞いて回ったところ，高齢者は大きい瓦礫の片付けや大きい荷物を運ぶのが大変だとのことだったので，リヤカーで瓦礫を回収して，工場跡地に運ぶという作業を始めました。

数日間，瓦礫の回収などを手伝っていくうちに，地域の人から「大丈夫だ，重い荷物もなくなってきたから，いいからお前たちは野球をやれ。」という言葉を頂きました。それでもグラウンドも壊れたままの危険な状態であったので，本格的に練習が再開できたのは 16 日頃だったと思います。

練習は再開したものの春の宮城県大会が中止と決まって，生徒たちの中では目標がなくなり，しばらくの間は気が抜けた状態でした。しかし，予選に向かうまで，生徒の考え方が少しずつ変わっていったように思います。

生徒の意識が変わった最初のきっかけは，遠征先で他校の選手から「甲子園大会の中止が決まったわけではないのに，やる気がなくなっているような奴らは甲子園に出場できないよ。」と厳しいことを言わ

れたことです。

その後も他県へ遠征に行って，試合をしていくうちに刺激をもらって，少しずつミーティングをする回数と時間が長くなっていきました。「このままじゃ駄目だ。」という雰囲気になってきたのが５月の中旬くらいでした。

生徒たちの気持ちが入れ変わって，６月は本当に充実した１ケ月を過ごしました。本気で甲子園へ行けるかもしれないと思うくらいに充実していました。今までこのような感覚はありませんでした。

東日本大震災を経験して，勝ち負けだけでなく，今こうやって野球がやれるだけで自分たちはすごく恵まれているということで，一生懸命やるだけだという雰囲気のチームになっていました。

大会では，ベスト４までは行きたいと思っていましたが，気持ちでは負けてないという雰囲気があったので，甲子園へ行けるかもしれないという感覚がありました。

実際に甲子園出場を意識し始めたのは優勝候補のひとつであった東北高校に勝ったあたりからです。

そして，優勝して甲子園大会に出場できることになりました。

本来であれば，小さいころからの夢だった甲子園の舞台に立てて嬉しい気持ちでいっぱいだったと思いますが，生徒たちは，試合前に野球以外の部分でいろいろと戦わないといけないところがあったと思います。

あの年に限って言えば，宮城県代表ということで東日本大震災に結び付けられました。「津波で亡くなった人はいませんか？」など，どうしても東日本大震災に結び付けて取材をされます。大崎市は内陸部にあり，津波による直接の被害を受けていなかったので，生徒たちもどう答えて良いかわからないところがありました。

生徒たちは苦しかったと思います。私は生徒達に「自分の夢だった甲子園という舞台で楽しもう。」,「地域の皆さんに感謝する気持ちは絶対忘れちゃいけないし，大崎の力を見せようぜって。」と話しました。

毎日グラウンドで監督に怒られ，野球だけをやっているとどうしても視野が狭くなるところがあると思いますが，震災を経験してあの時の３年生は大人になりました。

「自分たちは地域に支えられて野球をやっている。」,「自分が野球をやることによって，喜んでくれる人や支えてくれる人がいる。」,「自分一人で野球をやっているのではない，自分のためだけに野球をやるのではない。」と考えるようになりました。

震災はつらく悲しいものでしたが，生徒たちは数多くを経験した事で，広い視野で物事をとらえられるようになったのではないかと思います。

あの年以降も，生徒に対して心がけて伝えていることは，野球ができるとか，道具があるとか，何かにつけて「ありがとう。」と素直に言える人間にならないといけないという事です。

野球がうまければ良いのではなく，人間ができて野球がうまくなるということでしょうか。素直に謙虚に一生懸命やったら，結果はついてくる。野球の技術を磨く努力よりも人を磨く努力の方が難しいということです。

物を大事にしたりとか人に感謝をしたりとかそういう部分については，震災以前より口うるさくなったかもしれません。

平成 16 年から始動の生きた自主防災
次の備えのためには，語り伝えること

田尻地域富岡行政区区長　富田 精耕 様

大地を，海底を揺るがした東日本大震災があった 3 月 11 日は，私は一人暮らしの高齢者の家へ食事を持って行き話をしていました。その時に地震が起きました。

一度揺れがおさまった時に，2 階の屋根瓦が落ちてきたので，危険だと感じ，外に出ない方がいいと判断しました。その後，地震がおさまってから，家に戻りました。家の本棚には滑り止めをしていましたが倒れていました。すぐに子供たちから連絡があり，けが人はなく，家族全員の安否確認ができました。

私は自主防災組織の本部長をしていたため，避難所となる生活改善センターへ自転車で向かいました。地震が起きてから約 20 分経過しており，生活改善センターの鍵を開けたと同時に避難者が集まってきました。生活改善センターはトイレの水が噴き出し，表彰状の額が落ち，ガラスも割れていました。

私は，避難していた方々に生活改善センターの片づけをお願いし，自分の担当地区の見回りに出ました。

富岡行政区は田尻地域の中では一番大きい行政区で，2 人 1 組の 11 班で，全 234 戸を見回る必要がありました。3 月 11 日は金曜日だったので働きに出ている人もいたため，必ず 2 人 1 組になるという状態ではありませんでした。1 人で全てを見回ることができなかったので，災害時要援護者がいる家庭を優先して見回り，生活改善センターへ戻りました。ボイラーが倒れたなどの報告はあったものの，人身の被害はないことが随時入ってくる報告から確認することができました。

安否確認については，区長会で発案して作成した「無事を知らせる旗」が出ていない家を重点的に回りました。旗によるサインがあるとないとでは安否確認の効率が大きく違いました。昔は白いタオルを「無事を知らせるしるし」として使っていました。平成 16 年に作った自主防災組織で，岩手宮城内陸地震で大きな被害を受けた石巻の河南町へ視察に行きました。そこで，白いタオルをハンガーにかけて門の前に置いて無事を知らせる取組を見て，そこから白いタオルの訓練が始まりました。

白いタオルだと，夜間に地震が発生した場合は見えないため，「無事を知らせる旗」を作成しました。

家によってはすぐに「無事を知らせる旗」を出してくれたところもありましたが，実際には思い出して後から「無事を知らせる旗」を出すという家が多く，安否確認には時間を要しました。「無事を知ら

せる旗」が出てないと思って向かったこともありました。そのため，何も被害がないと時には，すぐに「無事を知らせる旗」出すという訓練が必要だと思いました。

避難所の防災倉庫には発電機３台，ガソリン携行缶，ハンマー，防水シートなどが完備しています。特に発電機はフル回転で使用しました。ガソリンの携行缶も役に立ちました。ハンマーもブロックなどを壊すのに使用しました。発電機はガソリン式であったので，燃料が切れると仙台まで行って調達する必要があり，燃料の確保が困難でした。その時の反省でその後，災害時に入手しやすいＬＰガス式の発電機を購入しました。

３月 11 日は，避難者が続々と集まり，夕方までには生活改善センターがあふれる人数になりました。生活改善センターだけでは対応できなくなったので，福祉センターが避難所となり，自主的に生活改善センターと福祉センターに分かれてもらいました。

夜を迎えて，炊き出しの準備が始まり，炊き出しはその後３日間続きました。食材等は地域で持ち寄りました。米は白米で持ってきてくれる人がいたり，周辺には農家が多く畑から野菜を持ってきてくれる人がいたりで，食材自体は不足しなかったです。

停電のため精米機が使用できなかったので，玄米を白米にするのは大変でしたが，基本的には炊き出し分の食材には困りませんでした。

いろいろな行政区の役員たちの奥さんたちが炊き出しに参加してくれました。災害があったら使用することになっていた業務用の厨房があり，そこで炊き出しをしました。

震災を振り返って思うことは，避難した人たちはあのときのつらさ，苦しさ，悲しさが一番わかるので，その時の経験を風化させないように何かの形で記念日などを設けることが必要だと思います。そのため，毎年３月 11 日近辺に当時の経験を忘れないように反省会を行うことを提案しました。

いつかは，記念日を設けるなどが必要だと思います。避難者を含めて，当時を思い出し，次世代へその時の経験を伝えていくということが大事だと思います。それが次の備えになると思います。

地域のシンボルであり，よりどころだった有備館復興を願い行政も町民も同じ意識で立つ

旧有備館及び庭園の早期復旧を願う会
会長　猪股　松男　様

訪問先で用事が終了して，お茶を飲みながら雑談をしていた時に地震に襲われました。今でも鮮明に覚えています。揺れが大きかったので，茶の間にいた 3 人で外へ出て，橋につかまって立っているのがやっとの状態でした。

揺れがおさまると自宅が心配になり，すぐ帰宅しました。自宅は停電していましたが，避難所へは行きませんでした。3 日間停電しており，電気と水がないのが一番大変でした。

翌 3 月 12 日に有備館が大変なことになっていることを知りました。旧岩出山町内で目立って倒壊した建物は有備館でした。現場へ行ってみると「倒壊しているので閉鎖します。」と市職員から報告があり，中へ入ることができませんでした。地域の人は有備館が倒壊した状況を見ることができなかったので，有備館がどの程度壊れたかわからず，話の伝え聞きで倒壊したという，風評が広がっていきました。

半月位してから市役所へ行った時に，有備館の話になりました。そこで，「地域のシンボルであり，日常のよりどころだった有備館が倒壊して残念です。」との話がありましたが，どの程度の被害があったのか状況がわからなかったので，「あのような状況で有備館を閉鎖したら，どの程度の被害なのか，地域の人たちは実感がわかないですよ。」と伝えました。また，「一般公開して，地域の人たちに大きな被害を受けた有備館に関心を強く持っていただきたいということを訴えたらいいのでは？」と伝えました。

「一般公開することにより，被害を受けた文化財の早期復興を願って，行政も地域住民も同じ意識を持つ。行政ばかりに任せるのではなく，地域住民もその文化財に対する関心を強くもっていただければ，復旧の度合いも早くなるのではないですか。」ということもお話しました。

そして，自分達が何もしないと復旧が遅れるのではと思い，10 年間継続して行っている有備館講座の執行部のメンバーに「我々で有備館が早期復興になる会を立ち上げて，活動してみませんか？」と相談して，執行部の 18 人で「旧有備館及び庭園の早期復旧を願う会」を組織として立ち上げました。会長は私がつとめました。

次は資金をどのように工面しようという話になって，地域住民にも呼びかけて会員を集め，その会費で現在活動しています。結果的に 83 名の会員を集めました。

活動は，5 月から始めました。地域住民の文化財に対する意識高揚を図るため，どのような啓蒙をすれば良いか相談した結果，まず，地域住民に「有備館の文化財に対する啓蒙を推進しましょう。」と呼びか

けをして，署名活動をしようということになりました。

「有備館の早期復興を願う会」として署名をしましょうと，それに伴って募金も集めましょうということになりました。

財政も困難な状況だったので，「署名」，「募金活動」，「メッセージ」を３点セットにして，地域内の人が集まる駅や役場入口，各公民館，道の駅などの窓口を利用して７か所に署名，募金箱などを設置して活動を開始しました。

地域住民に呼びかけるとき苦労した事は，住民の文化財に対する日ごろの関心が薄いことでした。

活動中は，「心のよりどころとしている有備館でもあるし，これだけの文化財を一日も早く元の姿に再建してほしいということをみんなで協力しあって国に訴えるべき。」と賛同する方もいれば，「なんでこんな活動しているのか。」，「有備館は文化財だから文部科学省がやるものではないのか。」，「国でやるのだからどうしようもないのではないか。」など厳しい言葉をもらう事もあるなど苦労はありました。

そのような中で署名は８月末で約 15,000 件，募金も約 120 万円集まりました。有備館が崩壊したというのがテレビのニュースで流れたのをきっかけとして，東京，千葉，神奈川など輪が広がり，多くの署名が集まりました。募金は現在も継続しています。

苦労はありましたが，地域の人から好意を持たれて協賛してもらえるようになりました。

こういう意識を次の世代の方々にも引き継いで，常に文化財に対する意識高揚を図っていただきたいというのが執行部の思いです。今後，署名や募金だけの活動で終わりではなく，また，有備館の復旧工事が着工したから終わりではなく，復旧した後も年に１回，２年に１回なり機会を設けて研修会等をしようと考えています。そのような活動が，次の世代の方々に，我々の意思を引き継いでいく手順ではないかと思います。

倒壊した旧有備館

地域と市と共同で，手を取り合いながら
一人一人が，自分たちにやれることをやりました

鳴子まちづくり協議会会長　高橋 鉄夫 様

３月 11 日の地震での我が家の被害は，観音開きの食器棚が開いて数枚の食器が壊れました。また,4 月 7 日の余震ではタンスが倒れました。どちらも大きな揺れに驚かされた地震でした。

３月 11 日の地震後，すぐに民生委員と区長と私の３人で地区内の全ての家に声がけしました。同時に地区内の被害の状況を確認して，市役所に報告へ行きました。最終的には 17 時を過ぎていました。

地区では自主防災組織を作っていて，災害時における避難の方法や情報収集などの活動をおこなっています。地震等があった場合は生活センターに集まることになっているのですが，３月 11 日の地震の２年前には生活センターまで徒歩でどれくらいかかるかを調べていました。生活センターは地区の中心にあり，高齢者だと１時間位，遠いところに住んでいる人では１時間 20 分くらいかかる人もいました。また，地区内の寝たきり高齢者宅の確認や発電機の有無の調査や賞味期限が迫っているアルファ米で炊き出しの練習をする機会なども設け，災害に備えた取り組みをしていました。

また，私はまちづくり協議会の会長をしており，毎月第３木曜日には「各地域づくり委員会連絡会議」としてまちづくり協議会の定例会を開催し，情報の共有や地域の課題解決のための活動をしています。

まちづくり協議会の事業のひとつに訃報処置事業というのがあります。以前鳴子温泉地域には新聞社があり，その新聞により鳴子温泉地域の情報がわかったのですが，いまは新聞社がなくなり，訃報などの情報が伝わらなくなりました。そこで私が住んでいる地区では情報不足という課題解決のため，各町内会による登録制の Fax 網を使用し，訃報を周知するという事業を行っています。

今回の震災では，この訃報処置事業を利用した災害情報の周知を行いました。

電話が通じない，ガソリンもない，情報の伝達手段が何もありませんでした。しかし，鳴子温泉地域は３日目の夜までに電気が９割５分程度復旧し，Fax が有効に使えたので，市の連絡事項を全て引き受けることとしました。住民へ周知する内容はごみの処理方法やし尿の取り扱いなど緊急を要すことでした。緊急のものや，どこで配給があるなどの情報も発信しました。

鳴子温泉地域は南三陸町などからの２次避難者が来て，多いときは１日約 1,000 人（延べ 10 万人超）の方々がいました。

これら多くの２次避難者を励ます意味で,「共に歩もう」というＡ３サイズのプレートを作成し，避難所の掲示板や集会所に貼りました。このプレートを貼っていることで，鳴子温泉地域に２次避難者へのおもてなしの意識が高まって行ったのではないかと思います。

最初は避難者がいるところを中心に活動していましたが，駅やバス通り，東京行きの直行バスにも協力いただき貼らせてもらいました。地元の工事現場にも貼りました。

避難所生活が落ち着いてくると町内の祭事が入ってきました。中山小学校の運動会です。2014年からは学校統合により，この年が最後の運動会ということで，その当時在校していた多くの人が来てくれました。全員縄跳びは，小学校の生徒，父兄，そして震災で避難していた20名の児童とその父兄とで楽しみました。久しぶりに笑顔が戻り，和気あいあいとしていました。

避難者は約3ケ月の間，鳴子温泉地域で生活して11月には仮設住宅が決まるなどして戻っていく人たちも出てきました。中山小学校が閉校する時も避難時に中山小学校へ通っていた児童などを招待しようと思っています。

また，地域づくりのひとつに，温泉ネットワークがあります。鬼首の地域づくりの方を中心に毎日タンクローリーで温泉のお湯を運び，避難者へ提供しました。最終的には自衛隊のお風呂の中でお湯を使ってもらいました。

これらの取り組みは，まちづくり協議会という事業を通して地域住民や市役所とのコミュニケーションを取りながら共同で行いました。鳴子温泉地域の一人一人が自分たちにやれることをやったと思います。

避難者へ手を差し伸べてやりたいという気持ちがいろいろな形で残っています。通り過ぎて終わらせないように「共に歩もう」を貼る活動は今も継続しています。

これらの経験を機会にこれからは「何したらいいかわからない。」という人たちも共に手を取り合って，みんなで協力して行っていくという形が大事だと思います。

ただし，重荷になってはいけないと感じるので，基本的にはやれる人がやればいいと思います。今後は，やれる人やリーダーとなる人などの後継者を地域で発掘していかないといけないと思います。リーダーが変われば，組織の運営も変わるでしょう。リーダーで変わることも出てくると思いますが，それもまた活性化につながっていくことになって，良いことではないでしょうか。

6-2 自主防災組織の記録

震災の記憶　～あの日の経験と教訓を今こそ次の世代へ～

大崎市古川西部コミュニティ推進協議会宮袋振興会

2011 年 3 月 11 日，14 時 46 分過ぎ，三陸沖を震源にマグニチュード 9.0 という巨大地震が発生し，宮城県では築館で震度 7，大崎市でも震度 6 強を観測。1923 年の関東大震災を上回る揺れは，近代的な地震観測が始まって以来と言われました。そしてこの地震により，大津波が発生し多くの建物や人の命が失われました。

今回の大震災で，過去に三陸を襲った地震と津波の被害があらためて報道機関で取り上げられ，古文書や石碑の建立などで，その悲惨さを私たち子孫に伝えてくれていたことが明らかになりました。
しかしその訴えは，歳月の経過と共に人々の記憶から薄れ，防災に活かすことができず，甚大な被害をもたらす結果となり，内陸・大崎市においても家屋の倒壊や道路の破損など被害が見られました。

多くの尊い命が教えてくれた震災の記憶を風化させることなく，記憶を記録に留めることが，残された人々の使命のひとつと考え，震災から 1 年の 2012 年 3 月 11 日，大崎市古川西部コミュニティ推進協議会宮袋振興会が，震災の記録誌として「震災の記憶」を作成しました。

内容は振興会の各班からの体験寄稿，医院やガソリンスタンド，保育園など各団体からの体験寄稿を中心に，各種資料の項では，今回の東日本大震災による大崎市の被害状況や震災から学んだことはもとより，心肺蘇生のしかた，AED 操作，先人の言葉，過去の大地震，宮袋自主防災組織活動内容とその記録などが記載されています。

あってほしくない災害。しかし，いつ起こるか知れないのが自然災害です。3.11 のあの震災で得た貴重な経験や教訓を次の世代へ伝えていくとともに，地域の皆さんのさらなる防災に対する意識の向上につながる記録誌です。

◎主な内容

1．西部コミュニティ推進協議会各町内会（自主防災）の取組
2．各班からの体験寄稿
3．各種団体からの体験寄稿
4．写真でみる被害状況
5．各種資料
6．防災計画（宮城自主防災組織）
7．宮袋自主防災組織活動記録
8．編集後記

“3 月 11 日”あの時からの記録　～記録は，稲葉の地に生きるものたちの責任～

稲葉南区の東日本大震災

東北のみならず，日本全体が衝撃をうけた東日本大震災。あれから２年半が過ぎ，いまだ復興半ば。あらためて地震・津波災害の大きさが伺えます。

あの日，稲葉南地域では道路や電柱の損壊，いたるところで液状化が見られ，人的な被害もありました。自宅の家具が倒れ，家財が壊れ，成すすべもなく呆然と立ち尽くしていました。家屋の倒壊で避難所生活を余儀なくされた人，ライフラインを絶たれたなかでの生活など，すべての家庭でそれぞれがあの日の不安と困難に耐え，今日に至っています。

稲葉地区の人々はあの震災から何を思い，何を学んだのか。歴史的な大震災と避難の状況を記録しておくことは，稲葉南区の地で生きるものたちの未来の人々に対する責任であると考え，昨年５月に記録誌が作成されました。

今回の震災は，これまで行われてきた訓練やマニュアルをはるかに超えた規模であり，地域の人々はあの瞬間，冷静に適切な判断で行動することは困難を極めました。この現実を踏まえ，被災状況や活動記録，今後の課題などを写真と共に記載。災害に関する備えの見直しにもなるべく記録として残された１冊となっております。

◎主な内容

１．東日本大震災と地域の被災
２．稲葉南区自主防災の組織
３．震災発生と地区民の避難所
４．稲葉南区の避難状況
　Ⅰ避難所の設営と非難
　Ⅱ避難者の避難行動
　Ⅲ避難所運営と人々の生活
　　①救援物資の供給とライフライン復旧情報の伝達
　　②食料・飲料水などの供給
　　③照明や暖房設備などの避難生活環境
　　④トイレ・寝具などの衛生環境
　　⑤電話（携帯）などの連絡通信
　　⑥新聞や掲示による連絡
　Ⅳ地域ボランティアと避難者の行動
　　①避難者の集団意識と行動
　　②避難所ボランティアの活動
　　③市災害対策本部スタッフや民生委員の活動
　　④行政区長と町内会や自主防災組織の活動
　　⑤避難所と学校の対応
　Ⅴ市総合体育館（武道館）避難所への統合と
　　古川第三小学校体育館避難所の閉鎖
５．避難体験から学んだこと
６．今後の課題に向けて

6-3 東日本大震災における各まちづくり協議会等の検証とふりかえりの取組

	団体名等	検証項目等	取組等
古川地域	古川まちづくり協議会及び各地域づくり委員会	・震災発生時の対応の課題 ・有事の際の各自の取るべき行動 ・地域防災組織体制のあり方 ・自主防災組織のあり方 ・自主防災組織の育成強化 ・自主防災組織の連絡会議の組織化 ・自主防災組織の活動範囲 ・災害情報の共有のあり方 ・災害弱者への対応と行政区長及び民生委員との情報共有のあり方 ・避難所運営のあり方 ・女性の力を活用した防災体制の確立 ・ボランティア組織との連携 ・安否確認マニュアルの検証 ・一時避難所（公会堂等）の耐震化 ・地元事業者との災害時の連携	・「東日本大震災における自主防災組織活動状況」アンケート調査の実施 ・地区住民への震災アンケート調査の実施 ・「震災の記憶」の冊子作成 ・地区災害対策本部運営要綱の作成 ・自主防災組織の活動内容の見直し ・地域内の各種団体との連携強化 ・各地域間における震災時の対応事例の情報共有 ・提言書「東日本大震災をふり返って」の作成 ・大崎市地域防災計画への意見，提言 ・地域防災マニュアルの作成及び毎戸配布 ・地域内防災マップの作成 ・地域内の井戸水調査とマップ作成 ・発災対応型防災訓練（安否確認含む）の実施及び防災研修の開催 ・地区民運動会での競技種目への防災訓練要素の取りいれ ・集会施設の耐震補強 ・自主防災組織の防災備品リストアップ及び適正管理 ・防災資器材の購入等（備蓄用水，発電機，ガソリン携行缶，精米機の導入等） ・地元業者との災害協定の締結（災害時の医療対応，避難場所及び食料等の提供）
松山地域	松山まちづくり協議会	・災害時要援護者マップの活用検証 ・震災時の自主防災組織等の対応検証 ・アンケート調査の結果に基づく検証 ・避難所の開設状況の検証 ・安否確認のあり方の検証 ・水害対応の検討	・松山ボランティア活動連絡協議会の共催で「ボランティア推進大会～東日本大震災，あなたは何をしましたか～」の開催 ・大崎市地域防災計画への意見・提言 ・検証を踏まえた自主防災訓練の実施 ・高齢者・一人ぐらし世帯への声かけ・見守り運動の実践

	団体名等	検証項目等	取組等
三本木地域	三本木まちづくり協議会	・震災時の各家庭の対応 ・地域防災体制の強化 ・今後の災害の備え ・震災時の自主防災組織等の対応検証	・三本木地域全戸を対象に「震災ふりかえりアンケート」の実施 ・アンケート結果の全戸配布 ・三本木地域防災訓練の実施
鹿島台地域	鹿島台まちづくり協議会	・震災時の個人としての行動の検証 ・震災時の団体長としての行動の検証 ・今後の不安や心配していること ・検証の課題解決に必要なこと ・安全で快適な暮らしに大切なこと ・課題解決のために必要な団体・個人の連携	・講演会「東日本大震災における被害の実態と教訓」の開催 ・各種団体長会議の開催 ・震災復興会議の開催 ・「大震災ふりかえり」ワークショップの開催 ・震災復興会議の報告書作成及び市長への要望書提出 ・自主防災会長との合同防災視察研修会の開催 ・社会福祉協議会鹿島台支所との共催による防災講習会の開催
岩出山地域	岩出山まちづくり協議会 まやま自治会 池月地域づくり委員会 上野目自治協議会 岩出山地域づくり委員会 西大崎地域自治協議会	・地区の取り組み状況 ・ボランティア活動の取り組み状況 ・安否確認と被害情報等の連絡体制 ・安心安全な避難場所の確保 ・非常用物資の確保と供給（水・燃料等） ・震災発生時の各組織の対応 ・震災対応時の課題 ・安否確認活動	・危機管理マニュアルの作成 ・地区防災資機材整備の検討会議の開催 ・地区自主防災組織連絡会議の設置 ・アンケート調査の実施 ・情報の交換や共有，講習会等の開催 ・防災意識の醸成 ・災害時，地域に残っている人達での具体的行動とルールづくり ・被災者支援物資の呼びかけと避難先への供給 ・被災地への支援物資の供給

	団体名等	検証項目等	取組等
鳴子温泉地域	鳴子まちづくり協議会 鬼首地域づくり委員会 中山地区コミュニティ連絡協議会 鳴子地域づくり委員会 東鳴子地域づくり委員会 川渡地域づくり委員会 鳴子♨地域づくりネットワーク	・震災でどのような対応ができ，課題，反省点は何かを検証 ①地域としてできたこと ②地域としてできなかったこと ③実体験から得た教訓 ・大崎市震災復興計画を検証 ・震災時に女性のできることを検証（男女共同参画の視点から） ・自主防災組織がどの程度機能したかを検証 ・自主防災組織をとりまとめる機関の検討。	・震災時の振りかえりと検証のアンケート調査を，全ての町内会を対象に実施 ・各地域づくり委員会でアンケート結果をとりまとめ，まちづくり協議会で冊子化 ・一時避難所を地域毎に再確認。 ・「ここは避難所です」看板の作成・設置 ・勤務時間帯等を考慮し，隣近所のお付き合いを促進しながら，防災訓練等を実施 ・「安全安心地域づくり講演会」の開催。 ・FAX 網を使用した災害緊急連絡網を作成 ・地域防災マップの作成・配布 ・集会施設における防災備品の確保 ・自主防災組織活動の見直し ・集会施設の耐震補強 ・被災者支援のぼり旗の作成・掲示 ・「共に歩もう」応援プレート作成・配布 ・二次避難者受け入れ支援（情報提供） ・「菜の花フェスティバル」への取組
田尻地域	田尻まちづくり協議会 沼部ふるさと委員会 大貫かんぼやま委員会	・今後の地域防災体制の強化 ・震災対応の検証（きづいたこと，大切だと思ったこと，課題だと思ったこと，課題を解決するための知恵・工夫・改善策）	・「東日本震災！どう動いたか」防災担当者情報交換会等の開催 ・地域づくり講演会の開催 ・「大震災の振り返り会議」の開催 ・放射能勉強会の開催 ・定期的に情報交換会を開催 ・防災用具（品）の充実（各自治振興会へ丸型石油ストーブの給付（各１台）と「安全確認旗」の補充）

6-4 震災復興作文

震災復興作文・小学生の部　最優秀賞

東日本大震災が教えてくれたこと

古川第二小学校五年　島 尾　桐 太

3月11日，東日本大震災が，ぼく達の住む宮城県をおそいました。えん岸部では，津波により，大きなひ害が出ました。

ぼくのおばあちゃん，いとこの家は，特にひ害の大きかった気仙沼市にあります。地震があった日の夜中，仕事から帰ってきた父から気仙沼の話を聞きぞっとしました。巨大津波におそわれた後，大きな火事が発生し，町はまるで火の海だと言っていました。心配になり，次の日から電話をかけましたがつながりませんでした。ぼくは（大丈夫。みんなはきっと生きている。）と，自分に言い聞かせ続けました。6日後，ようやく電話がつながり，全員無事だということが分かりました。そのしゅん間，ほっとしたというか，言葉にならないものを感じました。

ここ，大崎市も大きなひ害を受けました。一週間以上も電気が止まってしまいました。

ぼくは，この震災に教えられたことがあります。ぼく達は，電気や石油にたよりきって生活していたということです。地震発生当時は三月で，寒い日が続いていました。だんぼうが使えず，ぼく達は，家の中でもあつ着をして寒さをしのいでいました。ガソリンも入りにくかったので，買い物に行く時などどこに行くにも歩いて行動しました。

また，たくさんの人にお世話になりました。特に心に残っているのは，友達の家からストーブをかしてもらったことです。ガソリン不足が深こくな中，雪のふる暗い夜道を，中新田から車でとどけに来てくれました。

それから，電気の復旧支援に来ていた，中部電力さんからパンをもらった事もありました。食料の買い出しのため，店の前にならんでいた時，ぐずり出した妹のすがたを見て，「がんばれよ。」と，たくさんのパンをくれました。そのパンは，おじさんたちの昼食だったそうです。おしまずパンをくれたおじさん達の優しさを感じました。

その他にも，友達の家でお風呂に入れてもらったり，ご近所さんから，ラジオやかい中電灯をかしてもらったり，たくさんの人に助けられました。

人の優しさにふれ，ぼくはこう思いました。

「人は一人では生きていけない。助けてくれたり，はげましてくれる人がいるから生きていける。人間とは，支え合い，助けあって生きていく生き物だ。」

これが，今回の震災で感じた二つ目のことです。

今，日本は大変なひ害にあったにも関わらず，復興に向けて努力しています。ぼくは，この日本を復興するまで見守り続けようと思っています。

日本は強い国です。　「日本は必ず復興する。」　ぼくはそう信じています。

震災復興作文・中学生の部　最優秀賞

東日本大震災を経験して

松山中学校三年　鹿 野　幸 輝

卒業式を翌日に控えた３月 11 日，卒業式の準備の真っ最中だった２時 46 分，今まで経験した事のないような，大きく，激しい揺れが襲ってきた。

電気があっという間に消え，体育館の屋根が「カァーン」と鳴り響き，あちこちから悲鳴が聞こえ，今思い出してもあの時間は，生きた気がしない，地獄のような時間だった。

ようやく，長く激しい揺れが収まり，全員で昇降口前に避難したが，全く情報が入ってこなく，何もわからないまま，地区ごとに集団下校した。その道中，崩れたブロックや家屋，陥没したり隆起したりしている道路など変わり果てた町の様子を目にして，ものすごい衝撃を受けた。

これが元通りになるまでどのくらいかかるのだろうか，家は，家族は無事だろうか，そんな事を考えながら，自宅まで帰った。

めちゃくちゃになった家の中を祖父と母が片付けている間，僕は車の中で，ラジオを聴いていた。

ラジオからは，「本日午後２時 46 分に発生した大地震により，巨大な津波が押し寄せ，沿岸地域は壊滅的な被害を受けています。」と，耳を疑うようなニュースが聴こえてきて，その時は，「壊滅的」という言葉に実感が湧かなかった。

数ヵ月が過ぎ，元の生活が戻り始めた頃，家族皆で，石巻から仙台港までの，津波の被害にあった地域を見に行った。

途中に通った，野蒜という所は，小さい頃から，海水浴や観光などで何度も訪れていたが，津波によって変わり果てたその町は，僕の知ってる野蒜とは違う町のようだった。

その光景を見た時，僕は，「衝撃」を通り越して，「絶望感」を感じたと同時に，今回の震災が，歴史に残る大災害なのだという事を思い知らされた。

今回の大震災で，僕の住んでいる大崎市と沿岸部は，被害規模は全く違っていて，震災から半年たった現在の内陸は，もう普通の生活を取り戻しつつある。

しかし，建て物や住民が流されてしまい，町そのものが壊滅してしまった地域は，元の暮らしが戻ってきた訳ではない。

内陸部に住んでる人達は，どうしても，この事実を忘れてしまうと思う。僕も，そう。

大震災があったこと自体は忘れないが，元の生活が戻ってきて，ニュースでもそれほど沿岸部の津波被害の話題が取り上げられなくなり，家を失った人達や，壊滅した町がある事を忘れそうになる。

それが，良い事なのか悪い事なのかはわからない。

でも，沿岸部ではまだ完全に復興できていないのに，内陸の地域では元の生活に戻っている。自衛隊が撤退し，家を流された人が皆，仮設住宅に入居した。では，それで震災の復興は完了なのかといえば，そうではないと思う。

今回の大震災で，僕達は多くの仲間や町を失った。悲しみはすごく大きいと思う。でもいつまでも悲しんでいても，失ったものは何も戻りはしない。

だから，悲しみをこらえて，立ち上がり，

「俺達が，失った仲間の分も頑張るんだ。俺達の手で，もとの活気ある町を取り戻すんだ。」

という気持ちをもって，明るい未来へ向かって前進することが，沿岸部だけではなく，内陸部も，被災地から遠く離れた地域も，日本中がそうなることが，大事だと思う。

そして，僕達若い世代が，この大震災からの復興の先頭に立つべきだと思う。

今の幼い子供達が大人になる頃，つまり現在大人の方々が老後を過ごす頃には，震災以前よりもさらに活気に満ちた，元気な東北を造る，それが，この時代に生まれた僕らの世代の義務，宿命なのだと，僕は思う。

僕も，その中の一人として，元気な宮城，東北を築いていく仲間の一員になりたいと現在考えている。将来，どんな形で協力できるかはわからないが，震災からの復興に役立ちたい。そのためにもたくさん勉強して広く知識を蓄え，自分に何ができるかを考えてみたい。

まず今は，目の前の高校受験という壁を乗り越え高校でたくさん学ぶために，受験勉強や日々の学校での学習を頑張っている。

また，テレビのニュースや新聞の記事などを通して被災者や被災地のことを忘れないように毎日過ごしている。

いつの日か，僕自身が，笑顔溢れる宮城を，東北を築いていく一つの力になれるように。

震災復興作文・小学生の部

最優秀賞	東日本大震災が教えてくれたこと	古川第二小学校５年	島　尾　桐　太
優 秀 賞	復こうへの第一歩	古川第一小学校６年	佐々木　修　平
優 秀 賞	今回の震災で感じたこと	沼部小学校３年	及　川　こころ

震災復興作文・中学生の部

最優秀賞	東日本大震災を経験して	松山中学校３年	鹿　野　幸　輝
優 秀 賞	共に乗りこえていくために	古川南中学校３年	松　本　　優
優 秀 賞	東日本大震災	松山中学校３年	三　浦　弘　祐

※学校名，学年は，受賞決定時のものです。